NEWS

都市文化研究センターの活動
（2006年度末まで）

山野正彦

21世紀COE事業の最終年度となった2006年度も，実施計画に従って研究拠点形成事業を順調に進め，海外拠点を含む，今後の研究継続のための拠点整備を完成させることができた。

文部省からの2006年度予算追加配分1,120,000円のほか，大阪市立大学から重点研究経費として7,400,000円の支援を受けた。また2006年4月に開設された，大阪市立大学都市研究プラザとの研究上の連携を進め，2007（平成19）年度グローバルCOE応募に向けて，2007年度以降の事業計画策定に努めた。

最終的にこの2007年度グローバルCOEプログラムには，「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」という課題で，都市研究プラザを中核とする専攻等（拠点リーダー・佐々木雅幸教授）として，学際，複合，新領域分野に応募した。現拠点（文学研究科）からは6名が引き続き事業推進担当者として参加することになった。この申請は2007年6月に採択となった。これにより，上海，バンコク，ジョクジャカルタの3つのサブセンターは，2007年度からグローバルCOEプログラムの海外研究拠点として引き継がれることになった。

2006年12月にはバンコクで，2007年1月にはジョクジャカルタで，それぞれ第5回アカデミックフォーラムを毎年と同じく開催した。また2007年1月には中国史関係の3回のシンポジウムを開催した。

●センター会議の開催

第56回　2006年12月6日（水）
第57回　2007年1月10日（水）
第58回　2007年2月7日　（水）
第59回　2007年2月15日（水）
第60回　2007年3月14日（水）
第61回　2007年4月20日（金）

都市文化研究センター(UCRC)の全体的な活動とスタッフ

仁木　宏

2007年4月の新生・都市文化研究センター（以下，センターと略）の立ち上げにあたっては，左記，センター会議開催記録に見えるように，周到な準備がなされた。

2月22日付けで「都市文化研究センター規程」の改訂が行われ，3月14日には，「都市文化研究センター・センター会議規則」の改訂，「都市文化研究センター常任研究員・所長・副所長の選任に関する申し合わせ」の制定がなされた。

その結果，新所長に中川眞教授，新副所長（事務局長）に仁木宏准教授が選任され，新しいセンターの理念，プロジェクトなどの検討に入り，おおむね以下のような方針を決めた。

■理念

都市文化研究センター（以下，センターと略）は，現実の都市が要請する具体的な研究課題に対応して先端レベルの研究成果を生みだし，その高度な社会的貢献によって，文学研究科を世界最高水準の研究・教育拠点にすることを目的とする。

■ポリシー

⑴　対象を都市文化に特化した斬新で創造的なコンテンツの制作，発信をおこなう。
⑵　センターの研究員のみならず，少なくとも，文学研究科のあらゆる構成員に対して利便性の高い研究支援の方策についての戦略的な探査をおこなう。
⑶　大学院生，若手研究員に対して高度な教育・研究支援をおこなう。
⑷　センターにおける研究は，研究員による共同研究と，各研究員の個別研究のネットワークによっておこなう。

大阪市立大学に新設された都市研究プラザでは，左記の山野報告にあるように，文学研究科の21世紀COEプログラムを受けて，日本学術振興会「グローバルCOEプログラム」（学際，複合，新領域分野）における，「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」プログラム（2007年6月採択）を中心的に担ってゆくことになる。そこで，センターとしては，この都市研究プラザと密接に連携しつつも，それとの差異化をはかり，文学研究科の特色を発揮することを目標とする。

文学部・文学研究科教育促進支援機構が，学生・大学院学生の主に教育面における基盤的支援を行うのに対

し，センターは大学院学生，OD，PDや教員の研究面での先進的支援を行うことですみ分けをはかる。

以上のような方針のもと，従来のプロジェクトのうち，雑誌『都市文化研究』の刊行，インターナショナルスクール，上方文化講座，アーカイブス事業などを継続し，COE特別研究員・研究員制度を引き継いだ新たな研究員（ドクター研究員）制度を発足させることになった。

また，研究活動としては，大阪プロジェクト・重点研究を積極的に継続することにした。なお，文学研究科の重点研究「都市文化創造のための比較史的研究」（研究代表者；塚田孝教授）は，2007（平成19）年度が5年間の最終年度である。

さらに，センターの新しいプロジェクトとして，ドクター研究員による研究プロジェクトへの資金援助，科学研究費申請書を教員が作成するのを支援する講習会などを実施した。

旧来のCOE事業推進担当者に相当するものとして常任研究員を選任した。これにより，センターの教員スタッフは下記のとおりとなった。

所長：中川眞教授（アジア都市文化学）

副所長（事務局長）：仁木宏准教授（日本史学）

常任研究員：

井上徹教授（東洋史学），塚田孝教授（日本史学），水内俊雄教授（地理学），橋爪紳也教授（地理学，2007年10月退職），石田佐恵子准教授（社会学）（以上旧事業推進担当者から再任）

土屋礼子教授（社会学），平田茂樹准教授（東洋史学），多和田裕司准教授（アジア都市文化学），山崎孝史准教授（地理学），久堀裕朗准教授（国文学），森洋久准教授（地理学）（以上新任）

ドクター研究員に採用された若手研究者は次ページの**表**のとおりである。

2007年度は45名の申請があり，そのうち42名をドクター研究員に採用した。

COEプロジェクトからの支援があった昨年度までとちがい，研究員に研究費の支給することはできない。そこで，後述のように，希望する研究員にプロジェクトを立ち上げて予算要求してもらうこととした。

なお，研究員は，「大阪市立大学都市文化研究センター研究員」としての正式の身分を獲得し，研究履歴とすることができる。また大阪市立大学学術情報総合センターを利用することも可能である。

●センター会議の開催

新第1回　2007年4月13日
第2回　2007年4月20日
第3回　2007年4月27日
第4回　2007年6月8日
第5回　2007年10月12日
第6回　2007年11月9日

以下，各プロジェクトごとに記す。

インターナショナル・スクール「国際都市社会論Ⅰ」

井上　徹

2007年度のインターナショナルスクール（集中講義「国際都市社会論Ⅰ」）は，「比較都市論の試み」を共通テーマに，9月26～28日の3日間，大阪市立大学全学共通教育棟816教室で開催された。平均90名程度の出席者であった。

プログラムは，各日，午前に外国人招聘講師の講義，午後に若手研究者（UCRCドクター研究員・大学院生）の研究発表が行われた。外国人講師には，台湾清華大学（中華民国），相愛大学，ノースカロライナ大学（アメリカ合衆国）の研究者をお招きした。

昨年までと同様，今回も午前の部の同時通訳は，神戸女学院大学文学部の現代GP「通訳トレーニング法を活用した英語教育」との共同事業として行った。

午後に発表する若手研究者については，従来とは異なり，新たにトレーニングプログラムを導入し，きめ細かな事前指導を行った。発表に向けての留意事項を講義し，発表英文の添削指導を行い，英語での発表練習をさせた。これは，大阪市立大学大学院文学研究科が，「国際発信力育成インターナショナルスクール」というタイトルで応募した，文部科学省の「大学院教育改革支援プログラム」（2007年9月採択）を先取りして試行するものであった。

さらに，本プログラムの企画・運営にあたっては，大学院学生をTA（ティーチング・アシスタント）として参画させ，国際学会の企画・運営に必要な知識と経験を身につけさせた。

外国人講師の講義と若手研究者の報告タイトルは以下の通りである。すべての原稿をもとに，年度内に報告書を作成する。

1日目　9月26日（水）9：30～16：00

基調講演：谷富夫（大阪市立大学大学院文学研究科長）

講義：廖炳惠（台湾清華大学）

「中国近現代文学におけるメタファーとしての天候」

研究発表：

- 城山拓也（中国語中国文学）
  「中国のモダニズム作家，穆時英の文学について」
- 中條健志（フランス文学）
  「フランスの『マグレブ人』」と多文化主義」
- 奥野みち子（英語英米文学）

2007年度ドクター研究員一覧

氏名	所属・専攻分野等	指導教員	テーマ
中岡　深雪	経済学研究科	佐々木　信彰	上海における住宅市場の発展―制作の展開と市場の反応―
桑原　瑞来	アジア都市文化学	中川　眞	創作和太鼓の現代的意味における都市文化研究―社会的包摂と和太鼓パフォーマンスの役割―
水谷　清佳	アジア都市文化学	中川　眞	マダンをめぐる韓国の文化空間に関する研究 1970～1980年代のソウルを中心に
廣瀬　真琴	教育	細井　克彦	都市部の小学校におけるカリキュラム開発の特徴に関する事例研究
深見　俊崇	教育	細井　克彦	都市における教師・教員志望学生の実践イメージの実践的研究
劉　慶	国語国文学	久堀　裕明	日本の古典演劇と中国演劇との関わりについて
名和　久仁子	国語国文学	久堀　裕明	都市生活と芸能・文化
四本　奈央	国語国文学	久堀　裕明	上方における芸能と文化
根来　麻子	国語国文学	村田　正博	『萬葉集』宮廷讃歌における表現と思想―ウタの機能をめぐって―
足立　匡敏	国語国文学	村田　正博	近代日本における都市文化形成と和歌・短歌史
内田　龍史	社会学	谷　富夫	現代大阪における若者の「学校から職業への移行」と労働生活に関する実証的研究
妻木　進吾	社会学, 都市研究プラザG-COE研究員	谷　富夫	現代大阪における都市下層の生活・文化様式に関する実証的研究
向井　有理子	心理学	池上　知子	流入する異文化の受容
宮崎　弦太	心理学	池上　知子	都市的環境が対人関係の様態及び社会的拒絶に対する反応性にもたらす影響
木村　容子	西洋史学	大黒　俊二	中世イタリアの都市生活における説教－都市・教会・遍歴説教師
王　標	中国語中国文学	山口　久和	清代中期江南諸都市における知識人集団の研究
山口　晋	地理学, 都市研究プラザG-COE研究員	水内　俊雄	日本の都市の公共空間をめぐる文化的実践・管理の文化・社会地理学的研究
本岡　拓哉	地理学, 都市研究プラザG-COE研究員	水内　俊雄	戦後都市における居住貧困地区をめぐる社会的排除／包摂に関する地理学的研究
岡村　俊史	哲学	仲原　孝	都市文化研究の方法論
穴澤　彰子	東洋史学	井上　徹	中国唐宋時代の都市における宗教施設と民衆
山口　智哉	東洋史学	平田　茂樹	中国近世都市における祭祀空間―紹興新昌県を事例として―
室山　留美子	東洋史学	井上　徹	中国魏晋南北朝時代における都市（都・地方都市）と貴族社会の研究
永田　拓治	東洋史学	井上　徹	王都洛陽の研究
田原　憲和	ドイツ語ドイツ文学	神竹　道士	都市言語としてのルクセンブルク語コイネー成立とその変遷について
中林　隆之	日本史学	栄原　永遠男	古代における畿内地域の都市的展開とその機能 摂津―和泉―河内地域を中心事例として
村井　良介	日本史学	仁木　宏	「戦国領主」等の「領」の展開と、都市を中核とする地域経済圏の関係について
古野　貢	日本史学	仁木　宏	中世後期における政治権力の構造的特質と、都市支配との関わりについての検討
山下　聡一	日本史学, 都市研究プラザG-COE研究員	塚田　孝	近世瀬戸内海における都市と地域社会
後藤　真	日本史学	栄原　永遠男	都市文化に関わる研究資料と研究成果のデジタル・アーカイブ
天野　忠幸	日本史学	仁木　宏	戦国・織豊期の畿内・東瀬戸内海地域における支配構造の研究
島田　克彦	日本史学	塚田　孝	近代日本における地域社会構造の歴史的展開に関する研究
田中　大介	日本史学	栄原　永遠男	日本古代都城における市の構造と変遷
山崎　竜洋	日本史学	塚田　孝	近世四天王寺における楽人集団の社会構造と寺院社会構造についての研究
伊崎　文彦	日本史学	塚田　孝	戦後地域社会における「象徴天皇」の受容構造の研究
西尾　泰広	日本史学	塚田　孝	近現代日本における地域社会構造に関する研究―南王子村・八坂町の19～20世紀
村上　ゆり	表現文化学	荒木　映子	都市と郊外の二重生活におけるウルフのアイデンティティー
芝田　江梨	表現文化学	三上　雅子	1920～30年代の女性像（モダンガール）分析を通しての都市文化考察
清水　由紀	表現文化学	三上　雅子	都市の持続可能な発展と舞台芸術フェスティバルについて
図師　宣忠	京都大学 文学研究科 西洋史	服部　良久	中世南フランスにおける都市景観の変容と権力
新井　一寛	社会学	石田　佐恵子	タリーカの「スーフィー教団組織化」に見る都市カイロの民衆イスラーム文化
松田　いりあ	神戸大学 文化学研究科 社会文化	大野　道邦	1990年代以降のファッションメディア言説と企業文化の変容との関連をめぐる社会学的研究
村上　司樹	西洋史学, 都市研究プラザG-COE研究員	塚田　孝 （大黒　俊二）	成立期中世スペイン都市文化における教会の役割

※応募資格（2007年3月段階）
(1)博士の学位を有する者（2006年度取得見込みを含む）で，センターの研究プロジェクトの企画・推進に協力できる者。
(2)大学院後期博士課程の在学生または単位取得退学者で，センターの研究プロジェクトの企画・推進に協力できる者。博士論文執筆に向けて一定の研究成果を挙げていることを条件とする。

「トニ・モリスン『パラダイス』とエウリピデス―ギリシア悲劇から見た超自然現象と女のトラウマ」

2日目　9月27日（木）10：00～16：00

講義：ディビッド・ウィリス（相愛大学）

「日本における文化フロンティア―移民，教育，クレオール化―」

研究発表：

- 高智富美（社会学）
  「マルチエスニック・コミュニティにおける民族関係―大阪府八尾市を事例として」
- 本岡拓哉（地理学）
  「戦後神戸市における不法占拠地区撤去の社会空間的過程」
- 熊谷美香（地理学）
  「東京・京阪神大都市圏における国籍・ジェンダーによる居住分化」

3日目　9月28日（金）10：00～16：00

講義：ダニエル・ボッツマン（ノースカロライナ大学）

「人身売買からの解放？　19世紀日本におけるマリア・ルス号事件と解放の問題」

研究発表：

- 久角健二（日本史学）
  「近世柳井の市と地域社会」
- 齋藤紘子（日本史学）
  「近世畿内の村と領主支配―和泉国伯太藩下泉郷を事例に」
- 貝原哲生（西洋史学）
  「6～7世紀アレクサンドリアにおける騒乱の再考察―総主教の役割を中心に」

Comparative Studies in International Cities

Wednesday,　September 26

- Keynote Speech by Dr. Tomio Tani (Dean of the Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University)
- Lecture by Dr. Ping-hui Liao (National Tsing Hua University) "Weather as Metaphor in Modern Chinese Literature"
- Paper Presentation by Shiroyama Takuya: "Modernism in Chinese Literature: A Study on Mu Shiying's Works"

  Paper Presentation by Chujo Takeshi: "Multicultural Debates over Maghrebians in France"

  Paper Presentation by Okuno Michiko: "Toni Morrison's *Paradise* and Euripides： Supernatural Phenomena and Women's Traumas Examined in the Light of Some Greek Tragedies"

Thursday, September 27

- Lecture by Dr. David Willis (Soai University) "Transcultural Japan: Immigration, Education, and Creolisation in the Cultural Borderlands of Japan"
- Paper Presentation by Kochi Fumi: "Ethnic Relations in the Multiethnic Community: A Case Study of Yao City, Osaka"

  Paper Presentation by Motooka Takuya: "Socio-Spatial Process of Squatter-Settlement Clearance in Postwar Kobe City"

  Paper Presentation by Kumagai Mika: "Residential Differentiation by Nationality and Gender in the Tokyo and Keihanshin Metropolitan Areas"

Friday, September 28

- Lecture by Dr. Daniel Botsman (University of North Carolina at Chapel Hill) "Freedom without slavery? The Case of the *Maria Luz* and the Question of Emancipation in Nineteenth Century Japan"
- Paper Presentation by Hisazumi Kenji: "Markets and Local Society in Yanai during the Early Modern Period"

  Paper Presentation by Saito Hiroko: "Villages and Lordly Governance in Kinki Region of Early Modern Japan: The Case of Hakata Domain's Shimo-izumi-go District in Izumi Province"

  Paper Presentation by Kaibara Akio: "Reconsideration of Riots in Sixth- and Seventh-Century Alexandria with the Patriarch's Role into Focus"

大阪プロジェクト・重点研究の活動

塚田　孝

『都市文化研究』第9号に掲載した分（2006年12月まで）以後，2007年10月までに行なってきた活動は，以下の通りである。

研究会活動

①国際シンポジウム「政治・制度史料における文献資料学の新たな可能性」

（共催：特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生」）

2007年1月13日（土）9：00～17：20

大阪市立大学学術情報総合センター1F 文化交流室

- 平田茂樹（大阪市立大学）趣旨説明
- 呉　松弟（復旦大学）「宋代の人口史研究の諸問題」
- 廖　咸恵（台湾国立暨南大学）「『正道』と『小道』―宋代士大夫の知識追求―」
- 曹　家斉（中山大学）「地方志と外国漢籍―宋代駅伝制度研究解明の手掛かりとして―」

• 卞　　利（安徽大学）「明代徽州社会史研究における史料問題」
• 范　金民（南京大学）「清代前期における劉家港の海運業」
• 鶴成久章（福岡教育大学）「明・張朝瑞撰『皇明貢挙考』の資料価値について」
• 山本英史（慶応大学）「清代地方官の民衆統治認識」

②国際シンポジウム「東アジアの国際交流と中国沿海部の交易・交通・海防」
（共催：特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生」）
2007年1月14日（日）10：00～17：00
大阪市立大学学術情報総合センター1F文化交流室
• 井上　徹（大阪市立大学）問題提起
• 呉　松弟（復旦大学）「南宋期における人口移動」
• 曹　家斉（中山大学）「唐宋時代の交通中心の南移とその影響」
• 榎本　渉（東京大学）コメント
• 范　金民（南京大学）「明代後期の通番案（1573-1644年）」
• 陳　春声（中山大学）「潮州から漳州，泉州に至る海防体制」
• 岩井茂樹（京都大学）「清代中期の国際交易と海防」
• 渡辺美季（東京大学）コメント
• 荒野泰典（立教大学）「平戸を中心とする華人ネットワーク」
• 塚田　孝（大阪市立大学）コメント

③COE・重点研究／北京サブセンター　合同講演会
2007年3月15日（木）13：00～17：00
田中記念会館2階会議室
• 楊　振紅（中国社会科学院歴史研究所）「秦漢時代における法律体系」
• 陳　祖武（中国社会科学院歴史研究所）「江南の中心都市と乾隆初めの古学復興―蘇州，楊州を例として」

④比較都市文化史研究会　国際中世会議（英・リーズ大学）2007準備会
2007年4月21日（土）13：00～18：30
22日（日）9：30～12：00
大阪市立中央青年センターA棟3F1号室
セッション1
“The Features of the Medieval Cities in Japan : The Present Stage of Research”
• 山田邦和（同志社女子大学）「中世の首都・京都」
• 山村亜希（愛知県立大学）「中世地方政治都市の景観」
• 仁木　宏（大阪市立大学）「『寺内町』―日本中世都市と宗教―」
コメント：鶴島博和（熊本大学・イギリス中世史）
山田雅彦（京都女子大学・フランドル都市史）

セッション2
“Daily Life in Late Medieval Cities.”
• 佐々井真知（お茶の水女子大学）“Silkwomen in the 15th century London”.
• 上野未央（法政大学）“Minstreis in the 15th-16th century London”.
• 森下　園（上智短期大学）“Medieval City Life in the Book of Margery Kempe.”.
コメント：鶴島博和（熊本大学）
新井由紀夫（お茶の水女子大学）

セッション3
“Nation and Local Identities in Ireland, Scotland and Wales: Kingship, Saint and Crown”.
• 田中美穂（大分高専）“Ruaidri Ua Conchobair: The last High-King of Ireland”.
• 西岡健司（京都大学）“Saint Kentigern and the Isle of Britain”.
• 梁川洋子（関西大学）“The Crown and March Regality: Bohun-Mortimer Dispute in the late 13th century”.
コメント：鶴島博和（熊本大学）

セッション4
“Documents and Voice: The Way of Transmitting Intentions in Medieval Japan”.
• 小川弘和（熊本学園大学）“Documents and Voice in the Manors”.
• 高橋一樹（国立歴史民俗博物館）“Documents and Voice in Courts”.
• 小沢　実（東京大学）“Documents and Voice in medieval Europe: a comparative case”.
コメント：鶴島博和（熊本大学）

⑤比較都市文化史研究会「塚田孝著『近世大坂の非人と身分的周縁』をめぐって」
（共催：近世大坂研究会・部落問題研究所歴史部会・大阪歴史科学協議会前近代史部会）
2007年5月12日（土）13：30～15：00
部落問題研究所
評者：沢　博勝（福井県立博物館学芸員）「書評：塚田孝著『近世大坂の非人と身分的周縁』」
森下　徹（山口大学）「塚田孝『近世大坂の非人と身分的周縁』によせて」

⑥COE大阪プロジェクト・重点研究「歴史遺産と都市文化創造―総括のためのワークショップ―」（大阪プロジェクト・重点研究の総括のためのワークショップⅠ）
2007年6月10日（日）13：00～17：00
大阪市立大学711C教室（法学部棟11階）
• 井上浩一（大阪市立大学）「『歴史遺産と都市文化創造』プロジェクトの総括へ向けて―博物館・城壁・港―」

- 仁木　宏（大阪市立大学）「都市の歴史遺産と都市史研究」
- 北川　央（大阪城天守閣）「『歴史遺産と都市文化創造』プロジェクトへのかかわりと私自身の取り組み」
- 図師宣忠（都市文化研究センター研究員）「歴史遺産との向き合い方―メディアとしてのミュージアムと都市空間―」

⑦COE大阪プロジェクト・重点研究「東アジア近世における都市の社会的結合―総括のためのワークショップ―」（大阪プロジェクト・重点研究の総括のためのワークショップⅡ）

2007年6月22日（金）13：00～15：00

大阪市立大学法学部棟6階第2会議室

- 塚田　孝（大阪市立大学）「日本近世の社会的結合」
- 井上　徹（大阪市立大学）「中国近世の都市と社会的結合」

⑧COE大阪プロジェクト・重点研究「比較都市文化史「都市空間」総括―総括のためのワークショップ―」（大阪プロジェクト・重点研究の総括のためのワークショップⅢ）

2007年7月21日（土）14：00～17：00

大阪市立大学経済学部棟第4会議室

- 仁木　宏（大阪市立大学）「都市空間をめぐる近世と古代・中世」
- 大黒俊二（大阪市立大学）「都市空間と社会的結合の比較史」

⑨第4回「上方文化講座」〈菅原伝授手習鑑〉　後掲

⑩大阪市立大学重点研究「都市文化創造のための比較史的研究」総括シンポジウム

（共催：大阪市立大学文学研究科 都市文化研究センター）

2007年10月13日（土）9：30～17：30

大阪市立大学法学部棟11階大会議室

第1セッション「歴史遺産と町づくり」

- 井上浩一「『歴史遺産と都市文化創造』プロジェクトの総括―博物館・城壁・港―」
- 久堀裕朗「人形浄瑠璃の復活上演に関する諸問題」
- 土屋礼子「大阪の新聞と都市空間意識」

第2セッション「都市空間と社会的結合」

- 岸本直文「都市の形成とその特質―比較の視角―」
- 仁木　宏「都市空間をめぐる近世と古代・中世」
- 塚田　孝「日本近世の社会的結合―17世紀前半の都市法から―」
- 井上　徹「中国近世の都市と社会的結合」
- 大黒俊二「都市空間と社会的結合の比較史」

⑪比較都市文化史研究会「網野善彦氏の『中世都市論』を考える」―日本史・東洋史・西洋史からのアプローチ―

2007年10月21日（日）13：00～17：00

大阪市立中央青年センター3号室

報告者：村井良介（大阪市立大学），山崎覚士（大阪市立大学），図師宣忠（大阪市立大学），仁木　宏（大阪市立大学）

参考書／網野善彦著作集第13巻『中世都市論』（岩波書店，2007年5月）

報告書などの刊行

①『東アジア大都市の資本制文化と人間』（2006年12月刊行）／2006年9月1日（金）～2日（土）に開催された国際シンポジウム「東アジア大都市の資本制文化と人間―外国人労働者と民族関係を焦点に―」の成果を取りまとめた報告書。

②『中国の王権と都市――比較史の観点から』（2007年3月刊行）／2005年12月17日（土）に開催されたシンポジウム「中国の王権と都市―比較史の観点から―」の成果を取りまとめた報告書。

③『シンポジウム「歴史遺産と都市文化創造」Ⅳ「渡辺津と八軒家―上町台地北端部の水辺空間を再現する―」』（2007年2月刊行）／2006年10月22日（日）に開催されたシンポジウム「『歴史遺産と都市文化創造』Ⅳ『渡辺津と八軒家―上町台地北端部の水辺空間を再現する―』」の内容を取りまとめた報告書。

④『都市に対する歴史的アプローチと社会的結合』（2007年3月刊行）／2006年9月30日に開催された国際シンポジウム分科会「都市に対する歴史的アプローチと社会的結合」の内容を取りまとめた報告書。

⑤『文化資源としての宗族―中国の系譜と伝説』（2007年3月刊行）／2006年7月8日（土）に開催された国際研究集会「文化資源としての宗族―中国の系譜と伝説」の内容を取りまとめた報告書。

⑥『「大坂御仕置御書出之写」「大坂御仕置留」―大坂町触関係史料2』（2007年3月刊行）／大坂町触研究会で取り組んできた成果を取りまとめた報告書。

⑦『上方文化講座　曽根崎心中』（和泉書院，2006年8月刊行）／2004年度に行われた第1回上方文化講座〈曽根崎心中〉の成果を取りまとめたもの。

⑧『中日学者論中国古代城市』（2007年3月刊行）／北京サブセンターとの共同で刊行した論文集。

⑨『近世大坂の法と社会』（清文堂出版，2007年9月刊行）／2006年4月29日（土）・30日（日）に開催されたシンポジウム「近世大坂の法と社会」（共催：近世大坂研究会・都市史研究会）をもとに，近世大坂研究会の町触に関する共同研究の成果を含めて刊行した論文集。

データベースの構築

大坂の町触に関する重要史料である「せん年より御ふれふみ」（大阪市立大学学術情報総合センター所蔵）の画像と翻刻をホームページ上にアップした。

大阪・重点運営会議

以上のような研究活動を実施するために行われた大

阪・重点運営会議は以下の通りである。

第27回　2007年1月12日（金）　10：00～11：00
第28回　2007年2月9日（金）　10：00～11：00
第29回　2007年3月20日（火）　10：00～11：00
第30回　2007年4月13日（金）　10：00～11：00
第31回　2007年5月18日（金）　10：00～11：00
第32回　2007年6月15日（金）　10：00～11：00
第33回　2007年7月20日（金）　10：00～11：00
第34回　2007年9月14日（金）　11：30～12：30
第35回　2007年10月19日（金）10：00～11：00

上方文化講座2007〈菅原伝授手習鑑〉

久堀裕朗

2007年度の上方文化講座は，4回目にして初めて近松の作品を離れ，三大名作の一つ『菅原伝授手習鑑』に取り組んだ。

今年も学外非常勤講師として，竹本津駒大夫，鶴澤清介，桐竹勘十郎の三師を迎え，文学研究科教員とともに，8月29日（水）から31日（金）までの3日間（連日9：30～16：00），学術情報総合センター10階大会議室を会場にして，文楽人形浄瑠璃や『菅原伝授手習鑑』の魅力を多角的に分析する授業を展開した。

応募多数の中から抽選で選ばれた一般市民約100名と，学生約50名が受講。授業内容は以下の通り。

8月29日（水）
Ⅰ　合作浄瑠璃の時代（久堀裕朗・大阪市立大学）
Ⅱ　『菅原伝授手習鑑』解説（久堀裕朗）
Ⅲ　身替り説話の源流（小林直樹・大阪市立大学）
Ⅳ　中国演劇における身替り（松浦恆雄・大阪市立大学）

8月30日（木）
Ⅰ　『菅原伝授手習鑑』（寺子屋の段）講読（久堀裕朗）
Ⅱ　浄瑠璃の言語（丹羽哲也・大阪市立大学）
Ⅲ　『菅原伝授手習鑑』―語りと人形演出①（竹本津駒大夫・鶴澤清介）
Ⅳ　『菅原伝授手習鑑』―語りと人形演出②（竹本津駒大夫・鶴澤清介・桐竹勘十郎）

8月31日（金）
Ⅰ　近世における寺子屋教育（添田晴雄・大阪市立大学）
Ⅱ　近世大坂の芝居町（塚田孝・大阪市立大学）
Ⅲ　桐竹勘十郎師に聞く―実演をまじえて（桐竹勘十郎）
Ⅳ　文楽の至芸―太夫・三味線・人形，三業一体の舞台再現（竹本津駒大夫・鶴澤清介・桐竹勘十郎）

本講座は，文学研究科内に設置された「上方文化講座」企画委員会が実際の企画に当たったが，重点研究の活動の一環にも位置づけて取り組んでいる。

アーカイブス事業

森　洋久

大阪市立大学都市文化研究センターにおけるデータベースは，http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/ja/archives/database.htmlにまとめられている。このデータベースは同センターにおける様々な活動を通して作成された研究成果をデータベースの形にまとめたものである。以下のようなデータベースが存在する。

1. データベース総合検索

大阪市立大学都市文化研究センターのすべてのデータベースを全文検索する仕組みである。

2. エスノグラフィック映像コレクション

アーカイブス・プロジェクト「国際比較研究のための映像データベースおよびネットワークの構築」によって作成された。ISIジョクジャカルタ，カフェ放送てれれ，メディアクトから提供された映像作品とその詳細を公開している。

3. 上田貞治郎写真コレクション

上田貞治郎写真コレクションは，上田貞治郎（1860-1944）の孫にあたる上田順一氏より貸与いただいた大阪の古い写真のコレクションである。

4. 中国古地図on Globalbase

中国の古地図をGLOBALBASE ゲートウェイメカニズムを利用し公開しているものである。

5. 大阪歴史空間on Globalbase

1942（昭和17）年航空写真（大阪市所有）を擬似オルソ化し，1929（昭和4）年地形図および現代の地図と重ね合わせて閲覧できるようにしたもの。また，VIVA コンピュータの協力により，橋爪紳也氏の所有する膨大な絵はがきコレクションから，モダン大阪時代の風景や建築をセレクション。最新のWeb技術を使って，現代と過去の地図と航空写真を行き来しながら，モダンシティ大阪の風景を追体験することができる。

6. サウンドスケープ

大阪，およびジョグジャカルタのサウンドスケープデータを地図上にプロットしたもの。

7. せんねんより御ふれふみデータベース

8. 中国都市史文献データベースβ版

9. 都市大阪に関する歴史学分野文献目録

10. GIS Map Database

ジオデモグラフィックスなどコロプレスマップを中心

にGIS による分析地図。

11. 上海サブセンターデータベース

上海サブセンターにて収集した地図，写真，資料などをアーカイブ化したもの。

12.「多文化共生に関する都市実態調査」研究会

この他に，GLOBALBASEを用いて，NASA，およびNOAAの衛星写真をアーカイブしており，様々な世界地図とともに利用可能である。現在公開準備中を含め，以下のような衛星写真を準備している。

1. NASA Geosage 150m メッシュ 全世界（内部公開）
2. NASA Geosage 28.5m メッシュ 全世界（2008年春公開予定）
3. NASA DTED2 レベルデータ90m メッシュ 全世界（2008年春公開予定）

文学研究科叢書編集委員会

石田佐恵子

2007年度（第6期委員）の決定

- 中川　眞（UCRC常任研究員，文学研究科教授，アジア都市文化学）
- 塚田　孝（UCRC常任研究員，文学研究科教授，日本史学）
- 森　洋久（UCRC常任研究員，文学研究科准教授，地理学）
- 山野正彦（文学研究科教授，地理学）
- 山崎雅人（文学研究科准教授，言語情報学）

叢書第6巻の企画について

2006年9月30日・10月1日に開催された国際シンポジウム「文化遺産と都市文化政策」の成果をとりまとめて刊行する予定。

書　名：『文化遺産と都市文化政策』（仮題）
編　者：大阪市立大学都市文化研究センター（編集責任者・山野正彦）
出版社：清文堂

『都市文化研究』編集委員会

平田茂樹

COEプロジェクトの終了にともない，その機関誌として発行されてきた雑誌『都市文化研究』は本年度より内容を一新することとなった。年2回刊行を年1回とした。また，これまでは論文・研究ノート以外に，COE事業のニュースを中心に掲載してきたが，論文・研究ノート，特別寄稿，研究展望，翻訳，書評，ニュースなどにジャンルを広げ，広く都市文化研究の問題を取り上げる雑誌に改変した。

教員による科学研究費申請を支援する事業

仁木　宏

文学研究科教員の研究条件向上のための方策の一つとして，文部科学省・学術振興会の科学研究費補助金申請を積極的に行うよう以前から提唱されてきた。しかし，実際のところ，何度か申請しても採用されることが少ないため，申請そのものをあきらめがちである教員も多い。

そこで，申請書の書き方のノウハウを伝えることで，少しでも申請件数を増やし，よい申請書を提出することで採択される研究課題を増加させるため，「文学研究科教員のための科学研究費補助金申請アドバイスの会」を催した。

2007年10月9日（火）16：20～17：50
於　文学部会議室

当日は，近年，科学研究費の採否にかかわる審査員をつとめた経験がある，文学研究科関係教員２名から，申請書作成のポイント，審査基準の内容などについて，有益なアドバイスをいただいた。参加した教員は30名であった。

都市文化研究センターでは，この他，国の諸機関や財団等が提供する競争的資金の公募情報を継続的かつ機能的に文学研究科教員に提供する体制を構築してゆきたいと考えている。

ドクター研究員による研究プロジェクト

仁木　宏

先述したように，昨年度までのように，すべての研究員に研究費の支給をすることができなくなったため，希望する研究員から公募申請をうけつけ，すぐれたプロジェクトに資金援助をすることで若手研究者の研究支援を行うこととした。

2007年度第1期の公募には，10件の応募があり，以下の6件が採択された。予算は，文学研究科長裁量経費や重点研究より支援を得て，それぞれ50,000～100,000円を支給した。この金額で足りない研究資金（外国旅費など）は自己負担となる。

それぞれのプロジェクトは，特定のドクター研究員が研究代表者となり，それ以外に，別のドクター研究員や

OD・院生などを研究協力者とすることができる。予算申請の都合上，担当教員を配置することとしたが，プロジェクトの遂行はあくまで研究代表者・協力者によるものとし，実際，たいへん有意義な研究が行われたようである。

それぞれのプロジェクトの内容，成果については，後掲の報告（中間報告）を参照されたい。

2007年度第1期ドクター研究員プロジェクト一覧

No.	テ　ー　マ	ドクター研究員	担当教員
1	ルクセンブルク共通語（コイネー）研究	田原憲和	神竹道士
2	3世紀から7世紀の中国辺境都市における行政文書ー吐魯番文書の動態的類型分析からー	穴澤彰子	井上　徹
3	映像都市研究の構築に向けてー学際的共同研究による映像実践を通じてー	新井一寛★ 松田いりあ 梁仁實	石田佐恵子
4	教育困難校に挑む教師のアクションリサーチ研究	深見俊崇 廣瀬真琴★	添田晴雄
5	鈴木健一氏『古典詩歌入門』書評会	足立匡敏★ 根来麻子	村田正博
6	富山太佳夫氏との勉強会	村上ゆり	荒木映子

注）複数のドクター研究員によるプロジェクトについては，★マークが研究代表者

なお，2007年度第2期の公募を11月に行った。

1. 田原憲和（大阪市立大学非常勤講師）「ルクセンブルク共通語（コイネー）研究」

- **研究協力者**：小川敦（ルクセンブルク国立研究所客員研究員，一橋大学大学院言語社会研究科研究員），木戸紗織（大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）

本研究プロジェクトでは，2007年度中に5回の勉強会を計画し，2007年10月末までに3回の勉強会を既に開催している。

顔合わせを兼ねた第1回勉強会は6月16日に麗澤大学において開催された。第1回勉強会には4名が参加し，本研究プロジェクトの目的の確認と，参加者各自の研究の方向性についての説明が行われた。その結果，田原（ドクター研究員）がルクセンブルク語正書法史から，小川（ルクセンブルク国立研究所特別研究員，一橋大研究員）がルクセンブルク人の言語意識から，木戸（大阪市立大学大学院学生）が多言語都市における言語の社会性の観点からのアプローチで研究を進めることを確認した。

8月11日の第2回勉強会には3名が参加した。第2回勉強会は現地のフィールドワークを中心課題とし，ルクセンブルク国立図書館のLuc Deitz博士の助言を基に，ルクセンブルク市内の言語調査，とりわけ，ドイツ語とルクセンブルク語の使用領域に関する調査を行った。

5名が参加した第3回勉強会は，10月13日に大阪市立大学文化交流センターにおいて開催された。第3回勉強会では，木戸が「多言語社会の言語と社会ールクセンブルクを事例とした社会言語学的考察ー」というタイトルで報告を行った。木戸はここで，ルクセンブルクにおける三言語併用がルクセンブルク人にとってのアイデンティティ形成の重要な要因となっていることを様々なデータを基に分析した。また，ユーロバロメーターの結果を分析し，ルクセンブルク人の帰属意識についての報告も行われた。この点については参加者より異論があり，さらなる考証が必要であるという結論に達した。

また，引き続いて田原より「ルクセンブルク語正書法史に関する考察」の報告が行われた。ここで田原は，ルクセンブルク語正書法成立の歴史を⑴非公式正書法（文学者による正書法）の時代と⑵公式正書法（政府による正書法）の時代に分類し，それぞれについての分析結果を報告した。

⑴については，1829年に著されたアントワーヌ・マイヤー（Antoine Meyer）の『ルクセンブルク語パルナソス詩の試作』（E Schréck op de Lëtzebuerger Parnasus）に掲げられた文法と正書法の記述を紹介した。この作品自体，ルクセンブルク語による初めての文学作品であると位置づけられるものであるが，ルクセンブルク語についての記述もこれが初めてであった。1854年，マイヤーはさらに『ルクセンブルク語正書法についての規則小誌』（Régelbüchelchen vum Lezeburger Orthœgraf）を著し，独自の正書法をあらためて世に示した。また，マイヤーの『小誌』の翌年，当時の高名な方言詩人であったエドモン・ド・ラ・フォンテーヌ（Edomond de la Fontaine）が『ドイツ語ルクセンブルク方言の正書法についての試論』（Versuch über die Orthographie der luxemburger deutschen）を著した。また，フォンテーヌが『試論』において展開したマイヤー批判についても報告した。マイヤーとフォンテーヌの論争についてはこれまで取り上げられることが少なかったが，非常に興味深い点であり，論争についての資料の発掘を求める意見が多く見られた。

また，⑵公式正書法の時代については，1912年，1916年，1946年，1950年に出された正書法に関する資料を基に報告を行った。しかしながら，公式正書法制定については政治的な要素が深く関わっており，幾度も方針転換を迫られた点について報告を行った。

本プロジェクトにおいては，2007年度中にさらに2度の勉強会を重ねる予定である。勉強会で交わされた議論や意見をもとに，今後，それぞれの参加者が研究を進める，また，その成果を論文集としてまとめるという方向で準備を進めている。

2. 穴澤彰子（大阪市立大学非常勤講師）「3世紀から7世紀の中国辺境都市における行政文書ー吐魯番文書の動態的類型分析からー」

・研究協力者：室山留美子（大阪市立大学UCRCドクター研究員）

中国新疆ウィグル自治区内トルファン地区において発見された，3世紀末～7世紀中葉にかけての一群の文書群―トルファン文書―は現在中国国内だけではなく，イギリス，ロシア，日本など様々な国に所蔵されている。それだけでなく，同一文書群と思われる資料も分散されて保存され，さまざまな資料集に分散して公刊されている。そこで，研究の前段階として，このような状況にあるトルファン文書を北涼時代に絞って収集・整理を行う作業を必要とした。

具体的な作業としては，所蔵している資料集を整理した王素氏『吐魯番出土高昌文献編年』（新文豊出版公司，1997年）をもとに，トルファン文書の資料掲載箇所を確認し，その資料を収集した。また関連する1997年以降の最新論文を収集した。また，文書の書体・形式などを確認するために，2007年6月12日，東京都台東区の台東区立書道博物館を資料調査のため訪問し，文書が掲載されている資料を購入した（『台東区立書道博物館図録』）。

トルファン文書は，一度文書として使用された後に，ふたたびその裏を再利用したものが多い。さらに文書として破棄された後，紙が非常に貴重であった当地の地域事情から，死者の靴などの埋葬品を製造するための材料として再利用された。以上のような特殊な利用方法を詳細に復元することができれば，本プロジェクトの研究目的の一つである，文書行政の流れを動態的に把握することができる。そこで，出土トルファン文書（写真版）を複写し，表裏を一体の文書として再編集する作業を行った。

現在は，以上の再編集資料に基づき，一次資料（出土文書）を使用する際に重要となる形式的類型分析のための基礎作業を行っている。具体的には，文書ごとに，作成・使用年代（その根拠），墨書，藍書，朱書の別や，「謹啓」などの注目すべき文言等を整理した表を作成中である。

今後は，以上の基礎作業を早急に終了させ，分析作業に入り，報告書を作成する予定である。

3. 新井一寛・松田いりあ・梁仁實「映像都市研究の構築に向けて―学際的共同研究による映像実践を通じて―」

研究プロジェクト「映像都市研究の構築へ向けて」では，2007年11月現在までに，映像都市研究会を母体として，以下の3回の研究会を実施した。

映像都市研究会は，新井一寛（大阪市立大学UCRC研究員）を代表とする研究会で，本プロジェクトのメンバー10名で構成されている。主な活動は，本プロジェクト「映像都市研究の構築に向けて」の遂行である。ちなみに，第2回以降は映像社会学研究会との合同で研究会を実施している。映像社会学研究会は，伊藤公雄（京都大学教授）を代表とする研究会で，ドキュメンタリーや漫画など，ヴィジュアル・イメージを研究対象としている研究者等約10名で構成されている。同研究会は主に，定期的な研究会において，社会学における映像活用に関する研究を行っている。

①「研究会の活動方針，および英国王立映像人類学映画祭の視察報告」

2007年7月10日16時～19時

本研究会では，本プロジェクトの今後の活動方針について討議した。その結果，月に1回のペースで研究会を実施し，都市研究においてどのような映像活用が有効であるかを学際的に研究していくことが決まった。

また，英国王立映像人類学映画祭において，作品上映およびパネル参加を行った川瀬氏と，同映画祭を視察した石田氏から，それぞれの成果について報告があった。

Ⅰ．研究会の活動方針に関する打ち合わせ

Ⅱ．石田佐恵子（大阪市立大学准教授）＋川瀬慈（日本学術振興会特別研究員）

発表：「英国王立映像人類学映画祭の視察報告」

上映：上記映画祭で上映された何作品かの映像作品の一部を紹介

②「『個人による記録』のデジタルアーカイブ＝AHA!について」

2007年8月27日13時～17時（映像社会学研究会との合同研究会）

本研究会では，NPO法人remoで活動を行っている松本氏による発表が行われた。氏らの活動は，大阪市の特定地域の家宅を訪問し入手したホームビデオの映像素材を活用して，特定地域の歴史的な地理的心象風景を映像作品として再現するものであった。この活動は，従来の研究上における調査者（撮影者）―被調査者（被撮影者）という関係性を解体し新たな映像実践の可能性を提示した点と，歴史学における民衆社会史研究に通じるものとして，参加者に注目された。

また，氏らは，当該地域住民を対象として，その映像作品の上映会を開催することにより，地域コミュニティを活性化させる試みも行っていた。

Ⅰ．2008年2月開催予定のシンポジウム企画に関する打ち合わせ

Ⅱ．松本篤（remo）

発表：「『個人による記録』のデジタルアーカイブ＝AHA!について」

上映：『個人による記録』を編集した映像作品の一部

③「映像実践のコミュニケーションにおける人類学的探求」

2007年10月13日18時～21時20分（映像社会学研究会と

の合同研究会）

本究会では，以下の発表・上映をもとに，映像の撮影・編集・上映などの映像実践に関わる調査者―被調査者―鑑賞者のコミュニケーションのありかたを広く議論した。また，映像都市研究における映像人類学的実践の方法論と意義，その学問的かつ倫理的問題点について議論を行った。さらに，こうした「ミクロ」な関係性を対象とした映像実践が，地理学や歴史学，社会学などの映像活用と，都市研究においてどのように学際的な関係を構築することができるかについても議論を行った。

Ⅰ.「映像実践のコミュニケーションⅠ―「偽善」と「偽悪」の映像人類学」

司会：七五三大輔（京都大学 ASAFAS　博士後期課程）

1. 川瀬　慈（日本学術振興会特別研究員）

上映：*Room 11, Ethiopia Hotel*

撮影・編集・録音：川瀬　慈，22分／2006

発表：「コミュニケーション，コラボレーションの目撃者としてのカメラ」

2. 新井一寛（大阪市立大学UCRC　ドクター研究員）

上映：『同居とカメラ』

撮影・録音・編集：新井一寛，40分／2006

発表：「撮影・編集・上映のコミュニケーション」

Ⅱ.「映像実践のコミュニケーションⅡ―映像コミュニケーションの可能性」

司会：七五三大輔（京都大学 ASAFAS　博士後期課程）

3. 古川優貴（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）

上映：*present experiences*

撮影・録音・編集：14分／2007

発表：「見ることと語ること：経験／コミュニケーションにおける身振りと言語の位置づけについて」

4. 田邊尚子（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）

発表：「ワークショップ『映像と人類学：映像コミュニケーションの可能性』の活動報告および今後の展望」

上記3つの研究会では，人々の生活空間・実践を対象とした映像データの活用方法について，人類学的・社会学的視点から主に議論した。その成果は主に次の3点に集約できる。

第一点は，地理学や歴史学等で広く見られる「マクロ」かつ「生活者不在」の地理的映像データではカヴァーしきれない，人々の日常に根ざした視点からの「ミクロ」な映像データが，都市空間を多面的かつ豊穣に把握する上で，有効であることを再確認した点である。

第二点は，「ミクロ」な映像データを撮影・編集・上映するための方法論的基礎を固めた点である。

第三点は，第一点目で再確認した映像データの有効性に対して，第二点目の映像実践の過程における調査者―被調査者―鑑賞者の関係性が孕む「倫理的」な問題点について，議論を深めた点にある。

今後の研究課題は，本プロジェクトの従来の研究活動で，その有効性と問題についての議論を深めてきた人類学的・社会学的な映像実践における「ミクロ」な映像データを，地理学等による「マクロ」な視点からの映像実践と相補的に組み合わせ，都市研究における都市理解により有効な映像アーカイブスを考案することである。

今後は，今年度の12月と1月に研究会を1回実施する予定である。また，2月には，本プロジェクトの研究活動の総括として，2日間にわたるシンポジウムを開催する予定である。

4. 廣瀬真琴・深見俊崇「教育困難校に挑む教師のアクションリサーチ研究」

- **研究協力者**：高谷哲也（大阪市立大学文学部・特任講師），上森さくら（大阪市立大学大学院文学研究科・大学院学生）

研究の背景と目的

日本の代表的な都市である大阪市は，現在大きな問題を抱えている。大阪市の調べでは，2006年度において同市の生活保護の受給率は全国の政令指定都市，中核市の中で最も高く，人口1,000人に対して40.2人と深刻な現状となっている。この就学援助率と学力テストの結果に相関があり，就学援助率が高い学校や区では学力テストの平均が低くなるとの結果が報告されているように，都市の現状はその地域を抱える学校の教育問題と直結している。

ところで，わが国では2007年4月24日に全国学力・学習状況調査が実施された。全国の小学校6年生，中学3年生の国語と算数・数学についての学力を測定すると同時に，生活習慣や学習環境などの状態を把握するものであった。このような学力テストの実施については，「数値目標」による学校経営とその評価，教師に対する評価と管理，及び「数値測定」による学校間の競争を激化させるとの批判もある。

学力テスト自体はその方法上，各学校・地域が抱えている独自の問題の性質や大きさと学力の関係までを考慮することが困難である。そのため，本来，各学校の学力向上の議論には，地域や子どもの実態や保護者の教育観，学校・教員組織の文化・指導観などとの関係も含めて，テストの結果を分析することが必要不可欠である。しかし，それらを無視した，各学校の順位や全国平均との差といった，「数値」結果のみに基づいた学校批判が起こりかねない。

そこで，このような量的な調査では十分に明らかにすることができない地域背景や子どもの実態，保護者の教育観，学校・教員組織の文化・指導観に質的なアプローチで迫る，学校を単位とした総合的な研究が待望されている。

さて，子どもの家庭背景と学力との関係を調査した先行諸研究では,「学習意欲」「学習行動」「学習の成果」が,家庭の文化的環境の差,「文化的階層」の差と対応していることが指摘されている。また，現在の学力低下の問題は，子どもたちの全般的な学力の低下ではなく，階層による二極分化と,「できない」層への下支えがきかなくなってきている点にあることが主張されている。

したがって，現在の教育や学力の問題への実質的に有効な対応策を見出すために，その手始めとして，各学校が置かれている状況と教育課題の特質，児童・生徒の学びの実態，そこでの教師の取り組みの特徴を明らかにすることが重要であると考えられる。

そこで本研究は，教育困難校の実態改善を試みている教師たちの実践の特徴を明らかにすることを目的としている。

研究の方法

本研究の目的を達成するため，大きく分けて次の２つの研究を実施・計画している。

研究①：教育困難校の実態を調査した先行諸研究の知見整理

研究①は，次の研究②においてフィールドワークを行う際の理論的枠組みの構築を試みる。先行研究や，学校の紀要といった実践事例集を収集・分析し，教育困難校に特徴的な教育課題や，それに対する教師のアクションリサーチを整理する。特に，ここでは教育困難校が背景として抱えている都市問題を教育課題，それに対する教師のアクションとをあわせて明らかにし，類型化を試みている。

研究②：S中学校の実態調査

研究①にて構築した理論的枠組みを用いて，S中学校を対象としたフィールドワークを行う。具体的には，同校の教育課題と都市問題の関連性，生徒の実態とそれに対する教師のアクションリサーチに関するデータ収集を行う。例えば教師のアクション場面として，保護者・地域に対する学校への協力要請や，生徒への生活指導等を想定している。

フィールドワークを通して，学校や教員の取り組みの実態把握（授業・校内観察・インタビュー調査）や生徒の学びの実態把握（授業・校内観察・インタビュー調査・学力調査）に努める。収集したデータをもとに，研究①にて類型化した都市問題と教育課題，それに対する教師のアクションの中にS中学校を位置づけ，同校の特徴を浮き彫りにする。

S中学校の特徴を明らかにした上で，教育課題に対する教師のアクションリサーチを厚く記述することを通して，S中学校が直面している課題とその背景にある都市問題，それに対する学校・教員の取り組みの特徴を同定したい。

最終的には，研究①と②を合わせて，A）教育困難校が直面している課題，B）それに対応する教師の指導・授業方策の特徴を，今後は体系的に整理・モデル化していく。

現在までの研究の進捗状況

現在は，都市部に位置する学校の実態や課題について整理・分析している先行諸研究を読み解いている。先行諸研究と相対化させながら，本研究の意義や独自性の分析を検討している（研究①）。

また，それと同時並行して，都市部にある公立の中学校を対象とした調査研究（研究②）の実施を計画中である。現在に至るまで，S中学校の授業研究やその後の討論会に参加したり，同校の研究主任の実践研究に参画したりしながら，研究協力体制の拡充を推し進めてきている。さらに，同校の実践に関する資料（研究紀要や指導案等）を収集し，その分析を行っている。

なお，調査実施に関しては，初回の2007年6月5日を皮切りに，S中学校の教職員と打ち合わせを重ねてきている。現在は，今年度末から来年度における調査研究の実施に向けて，S中学校と研究計画等の調整を行っているが，その大筋は，次の通りである。

調査対象は，校長などの管理職，研究主任や教員，さらにかつてS中学校に赴任していた教員など，多岐にわたる。彼らに対して，主に授業や生徒指導の取り組みなどに関する聞き取りを実施し，A）教育困難校が直面している課題，B）それに対応する教師の指導・授業方策の特徴を明らかにしていく。現在は，データの収集・分析の手続きについて更なる議論を進めている。その結果に基づいて，聞き取り対象者の属性（職務・所属等）を具体化し，S中学校と調査の細部を詰めていく予定である。

なお，調査研究の成果は，来年度以降の学会等にて報告・公表していく予定である。

5. 足立匡敏（国語国文学・後期博士課程・大学院学生）・根来麻子（国語国文学・後期博士課程・大学院学生）「鈴木健一氏『古典詩歌入門』書評会」

- **研究協力者**：西田正宏（大阪府立大学人間社会学部准教授），南山かおり（大阪女子短期大学非常勤講師），三根亞希子・小笠原愛子・能登敦子・田中寛子（以上，大学院学生），岡崎智美・久米史織・三田聡美・浅野聡・岡嶋奏歩・福地香織・堀友美・門野里海（以上，学部学生），高重久美（国語国文学・後期博士課程・修了生）

①鈴木健一氏著『古典詩歌入門』書評会

2007年9月11日（水），学習院大学教授である鈴木健一氏を本学にお招きし，氏の著書『古典詩歌入門』（2007年4月，岩波書店）の書評会を行った。会では，院生4名による発表（書評）を中心に，和歌研究の現状や今後の可能性などについて議論を行い，非常に充実した会となった。ここでは，当日の内容についてだけでなく，書評会開催にいたる準備も含めて報告する。

②プロジェクト内容

今回の企画の内容は，2007年4月に刊行された鈴木健一氏著『古典詩歌入門』について書評会を行うことである。ただし書評会と言っても書評の内容をまとめ批評することに終始せず，参加者それぞれがこの書を受け止め，新たに提言を加えるようなシンポジウム的書評会にすることを意図した。

③書評会開催までの準備

今回のプロジェクトは，遠里小野会〈和歌史を学ぶ会〉（大阪市立大学国語国文学教室の大学院学生・学部生を中心に結成した研究会）と協力して行った。当日まで，以下の日程で『古典詩歌入門』の理解を深めることに努めた。

8月9日（木）鈴木先生の研究史について

8月16日（木）『古典詩歌入門』「Ⅰ　第一部」についての読書会

8月23日（木）『古典詩歌入門』「Ⅰ　第二部」についての読書会

8月29日（水）『古典詩歌入門』「Ⅱ　第一・二部」についての読書会

9月13日（木）書評会プレ発表会

④当日

当日は，司会の高重久美氏による鈴木先生の紹介の後，次の4名の院生が，それぞれの観点から書評を行った。

〈自然〉と〈人間〉という評価軸をめぐって

前期博士課程　能登敦子

「第二章『〈伝統〉と〈現在〉』」について

後期博士課程　三根亞希子

テキストの〈内部〉と〈外部〉との関わりをめぐって

後期博士課程　根来麻子

実証と感性 ―『古典詩歌入門』の構成と研究史における意義―

後期博士課程　足立匡敏

休憩をはさんで，鈴木先生から4名に対し発表内容についての質問や意見をいただき，その後，会場の遠里小野会のメンバー，当日の参加者を交えて議論を行った。鈴木先生が，私たちの発言を丁寧に受けとめお答え下さったおかげで，参加者が発言しやすく，議論は終了時刻を30分以上過ぎてようやく終了した。会の終了後，いわし亭で先生を囲み懇親会を行った。

⑤成果

何よりもまず著者を前にして書評を行うという会の形式が，発表者にとって緊張感があり，かつ刺激的であった。また『古典詩歌入門』の内容が，日本の詩歌を通史的に考える上で根幹となる表現の多義性・重層性の問題を考察しており，参加者それぞれが自身の研究を広い見地から捉え直すよい機会になった。加えて当日までの準備の中で，書評とは何かということを考えたことも意義深かった。さらに会の終了後，鈴木先生と食事をしながら親しくお話させていただいたことも，先生を大学にお呼びしてこそできる貴重な経験であった。

今回，基本的にドクター研究員の手で自由にプロジェクトを創り上げることが許された。そのため企画段階から新しい研究を提唱しているような感覚があり，プロジェクト終了後も言いようのない達成感があった。こうした機会を与えていただいたことに，深く感謝したい。遠里小野会のメンバー，そしてお忙しい中，書評会に参加して下さった塚田孝先生，丹羽哲也先生に対してもこの場をおかりして感謝申し上げたい。

6. 村上ゆり「富山太佳夫氏との勉強会」

2007年9月17日（月）・18日（火）の2日間に亘り，青山学院大学文学部英文学教授の富山太佳夫先生をお招きして「特別講義」をしていただいた。大阪市立大学に於いて両日とも10：00から17：00までの集中特別講義に，学内の院生をはじめ既に大学院を修了され教職に就かれている先輩諸氏，また他大学大学院生そして修了後に教職に携わっておられる研究者の方々，延べ総勢60人程の参加者があった。参加者の中には九州は熊本県からの泊りがけの参加者や，三重県からの参加者もあって，熱心な参加者の聴講する中で，富山先生の熱い講義が繰り広げられた。

「特別講義」のテーマは「都市文化としての貧困―世紀転換期ロンドンにおける貧民救済と宗教活動」であった。初日に聴講者は自己紹介を兼ねた各個人の研究テーマを発表した。富山先生はその個々の研究内容に関連を持たせた講義へとリンクさせ，全体を展開されたために聴講生みながかなり深い関心を得た内容となった。

文学を理解する上での宗教に対する認識の必要性から始まり，宗教の（西洋文化の場合キリスト教であるが）各宗派が文学上にどのように現れているかの具体的な例を取り上げながら話が進められた。その概略はRoman Catholic（旧教）に対するProtestant（新教）にはヘンリー八世が作ったChurch of England と戒律の厳しいLuther 派とCalvin派が含まれている。Church of Englandはさらに High Church（英国国教会においてカトリック教会との歴史的連続性，主教職と洗礼・正餐の尊重などを強く主張する派），Low Church（福音を強

調する派), Broad Church（英国国教会内の自由主義派）に分けられる。更に, 英国国教会のDissenters（反対派：非国教会）にはQuaker（クウェーカー派), Baptist（バプティスト派), Methodist / Primitive Methodist（メソディスト派／原始メソディスト派), Congregational（会衆派), Presbyterian（長老派）がある。

これらの宗派別的な内容を踏まえて，文学史における例を挙げると，19世紀前半のイギリスの詩人，批評家のコールリッジは，英国国教会内の自由主義派で「奇跡」を認めないBroad Churchに属し，カントの思想をイギリスに移入しその自由主義思想を土台にした作家であったことや,『アダム・ビート』を書いたジョージ・エリオットは作品中にメソディスト派に女性説教師（Dissenter）がいたことの論証として, ウェズリー派（＝メソディスト派）のダイナ・モリスを登場させた作家であったこと等，作家と作品の背景には何らかの形で宗教の宗派の認識が要求されている事実を理解しなければならないということが強調された。

次に，イギリスの小説史の頂点をなすのはジェイン・オースティン，チャールズ・ディケンズ，D・H・ロレンスであり，彼らの作品に見られる都市と貧民の文化から“Charity”の歴史的な位置づけを読み取ることが出来るということが解説された。具体的にはオースティンは『エマ』を貧しい階級の人間を育てる教育小説として，またディケンズは『クリスマス・キャロル』（守銭奴で有名であったクルージー老人がクリスマスイヴに亡霊の訪問を受け, 従来の自分の行いが間違っていたことを悟り, その後チャリティー活動を行う＝Charity Organization）のような教養小説として，さらにロレンスはといえば，ロンドンのデカダンスつまり世紀末の虚無的，頽廃的な芸術の傾向を『チャタレイ夫人』や『息子と恋人たち』等の作品に著した，といった具合に，三人の作品には①Charity（クリスチャンからクリスチャンへの愛の行為）②Tour / Travel（文明国での学習：情操教育）③East End（Settlements/Salvation Army：慈善事業）に関する内容が読み取れるということである。

①のCharityについて，さらに具体的に述べると，ヴィクトリア時代の中級の女性の義務は教区（Parish）を廻って貧しい人々を訪問することであったという。このチャリティー活動が後に産婆養成病院，看護士の出発点，孤児の養育院へと裾野を広げて③のSettlementsへと繋がっていくことになる。

②Tour / Travelに関しては大別して⑴Grand Tour, ⑵Inland Tour, ⑶Travel to the Coloniesと分類される。グランド・ツアーとは貴族の子弟が家庭教師や，召し使いとともにパリやイタリア等のような文明都市を旅して学習をすることである。ラドクリフの『イタリア人』やスターンの仏伊旅行印象記『感傷旅行』などの作品がある。⑵のイングランド内部への旅とはPicturesque Travel（イギリスの自然を観賞する旅）とEconomic Travel（農村の生産力を見る旅）である。前者の代表的な詩人としてワーズワース（Wordsworth）がいる。また後者の例として，コベットの農村の生活状態を視察する為に馬で巡回した紀行『田園騎乗』や，またイギリスの農政問題を描いたハガードの『田園英国』などもある。⑶の植民地への旅の代表的なものとしてイギリス近代小説の先駆者デフォーの『ロビンソン・クルーソー』等を挙げることが出来る。

③文化都市，ロンドンへの旅を考察する場合には，Tour to the “Darkest England”，つまり，ロンドンの貧民街East End（“Darkest Africa”をもじって，East Endを“Darkest England”と呼ぶ）への旅が焦点となる。East End貧民街が陸と海の接合点として歴史的にどのような働きをしたのかを考察していくと，奴隷貿易が貧民都市の歴史的背景に存在することを無視することはできない。

East Endに関しては，ヴァージニア・ウルフの作品と対照的な小説として『ロバート・エルスミア』に特に重点を置いて解説していただいた。イースト・エンドを舞台にした貧民社会や信仰の問題を扱ったこの小説は精神主義的ロマンス小説として，当時ベストセラーとなった。著者はミセス・ハンフリー・ウォード，彼女の家系もウルフと同じような知的貴族の筋で，祖父はオックスフォードの教授で名高いトーマス・アーノルド，伯父の一人には『教養と無秩序』を著したマシュー・アーノルドがいた。

このウオードとウルフの作品を比較すると，よく似た環境で育ったにも関わらず，その対比に興味深い事象が見えてくる。たとえば，ウォードの作品で重要な位置を占める宗教的な問題は，無神論者とも言われるウルフの作品にはほとんど見られない。また作品の背景に関しても，ウルフの場合には，イースト・エンドのような貧民街をテーマにしたものはみられない。『ダロウェイ夫人』のように，むしろ中産階級に生きる登場人物の心理を描いた作品がウルフの代表作とされる。このような作品の対照性に加えて，ウルフの階級意識が次のような差異を生んでいる。ウォードは『ロバート・エルスミア』をきっかけに，社会事業の一環として，後にロンドンの貧困地区にSettlements（貧民救済所：授産所や託児所等の社会事業施設）を設立した。ウルフの場合は，自らが身体を使って社会事業をしたというより，社会制度を批判したり，女性の地位向上の必要性を訴えたり，人権問題を論じたりする作品を多く世に送り出して，知的に行動を起こしたという相違点が挙げられる。これらの比較点をもっと掘り下げて，ウォードの視点からウルフの視点を逆説的に浮き上がらせて，研究することが今後の課題

である。

ウォードとウルフに関連付けた貴重な講義を含んだ，2日間に亘る「特別講義」では，世紀末文学全体を宗教を踏まえて大きくとらえ，3つのキーワード（チャリティー，ツアー，セツルメント）を軸として読み解かれ，それぞれの研究テーマに関連させることができた。

最後にイギリスの食器文化に大きな痕跡を残しているウェッジウッドの絵柄に黒人奴隷の図がある由縁の解説から，ウェッジウッド社の奴隷制度反対を知り，以前にウェッジウッド会社見学に行った際に見た奴隷制度解放運動の歴史に関する大きなパネルの掲げられた部屋を無意識に歩き回ったことをふっと思い出した締めくくりであった。